

叔母の家はランプ生活

里草会顧問 福井正樹

叔母の家は5キロ余り離れた村にある。ちょっとした用事があると、小学生の私が使いに行かされる。味噌の麴を背負わされたり、何かのタネを届けたり、手伝いに来てほしい仕事と日程を頼みに行ったり、法事などがある時に集まるように伝えたり、ことある毎に行かされた。今なら電話で簡単に済むことも、当時は小学校に電話があるだけだ。遠くの人からの連絡は、学校の小使いさん（管理人）が受けて、その家に行って内容を伝えるか、内容が厄介だったり相談事などの場合は、相手が電話口で待っているので、電話をしてほしいと伝言することになる。不便なので普段は電話を使うことはなかった。

お使いは学校から帰ってからゆくので、日の短い秋や冬は帰りが暗くなる。月が出る時間を考えて、今日は伝えたら急いで帰れとか、晩ご飯を食べさせてもらって月が出てから帰ってこいとか、翌日休みなら泊まっても良いなどと言われる。

「弁当忘れても傘忘れるな」と言われる但馬のことだから、雨が降りそうな時には傘を持って行くのだが、竹の骨の太い油紙の傘なのでそれだけでも持ち重りがする。途中の村の子が集まって、いじめないまでもじろじろ見て、何かをささやき合う。

伯母の家は隣の校区にあり、中心の集落の端から山道を1キロくらい登る。ちょっと開けた場所に4軒ほどの家があって、その真ん中あたりだ。電気が引かれたのは私が高校生になってからなので、当時はランプの生活だった。伯母は祖父母の長女だが、夫は戦死して4人の子供と暮らしている。祖父にしてみれば何かと面倒を見なければならぬし、伯母も何くれとなく相談し、最も行き来の多い親戚であった。

4人の子供の一番下が私より2歳年上で、2、3歳づつ年が離れており長男は叔父より2歳くらい下で、私と叔父の間が繋がる。兄弟のようにしていろんな話もできるし、私も何かと頼みにし、みんなからも可愛がられた。竹スキーなどの遊び道具も、年上の従弟などが器用に作ってくれたものである。思い返してみると、伯母の家は大きな二階建ての総瓦葺きの家で、ほとんどが藁屋根の時代なのだから、以前は財力があったのだろう。

座敷にも掘りごたつがあり、他では見たことのない手回しの蓄音機もあった。当時は山や木材が価値を持っていたので、集落から離れた山の中にあっても、自給自足の生活は意外に豊かだったのだろう。グミやカキなど家にはない果樹品種もあったし、集落の人達も山仕事に入る時は寄って話したりお茶を飲んで行った。村の様子もよく判って、疎外感などなかった。年中使う燃料の薪や柴のことを考えると、山の中に家があることは運搬もたやすく、集落の中に住むより便利でもあったのだろう。

私にとっては手ごろな兄にあたるわけで、学校の休みの時などお使いを兼ねて泊まりに行き、一緒に周辺を遊びまわったものである。すぐそばに大きな貯水池があり、竹のいかなどを浮かべて水遊びや釣りもできた。犬を飼っていて、当時は繫いでいなくて、どこへ行くのにも付いてきた。アヒルも飼っていたが、放りっぱなしで田んぼに入り餌をとつ

ていた。夏は野山が遊び場だったし、冬は掘りごたつの部屋でカルタや将棋をして雑魚寝をしていた。家に居るよりうるさく言われたいし開放的で楽しかった。

今になって思い出してみると、同級生たちはおじさんやおばさんやお母さんの実家などによく行って、年の近い従弟たちと遊べた。私の場合、父が早くなくなり戦争によってみんながバラバラになって、父方の付き合いが無かった。私と年齢の近い男女の従弟は6人余りいるのがずっと後になって知った。また祖父母の子供、すなわち母の兄弟も成人してから亡くなっており、この伯母の家が唯一の親戚だったのである。

二歳年上の従弟は山の中のことをよく知っていた。トビがどの木に巣をかけているか、山のどこにマツタケが出るか、どの山に行くと水晶が採れるか、キジの巣が去年はどこにあったか、実際山野を駆け回りながら教えてくれた。

雪のわずかに降った早朝、針金を輪にただけのウサギの罾を見回りに行って、ウサギが掛かっていたことがあった。年に一回あるか無いかの収穫で、私が行くと幸運に恵まれるということになっていた。ウサギの皮をはいで板に貼り付けて乾かし、ちゃんちゃんこの背中に縫い付けるとあたたかい。肉はもちろん汁にして食べた。タンパク質や脂肪の不足している時の肉は、格別美味しかった。

春にはウサギの子供を捕えて、頑丈な木の箱で飼えるようにして持ってきてくれた。可愛がって餌も良くやったが全くなつかない。とてもうれしかったのだが、何日目かに逃げられてしまった。狸を捕まえて家に持ってきたこともある。庭の牛をくくる木にぶら下げて、皮をはごうとしたらいきなり暴れはじめた。狸が死んだふりをするというのは、簡単に失神してしまうからだ。祖母の若いころ、繭の糸を引いて沢山出る蚕のさなぎを背戸に捨てていたら、毎晩狸がやってくる。村の若い衆が待ち伏せていて、薪で殴りつけると死んだふりをするので、簡単な捕まえたそうだ。

このころの山里は、おとぎ話のかちかち山に登場するように、ウサギやタヌキが身近に暮らしていた。いまでもよくタヌキは出没しているが、ウサギは見られなくなった。里山の構造が変わって草原がなくなり、ウサギには住みにくく、狸は人の出すゴミに依存するようになったのであろう。

今でも半信半疑なのが、サンショウオを食べたことである。ハンザキと言われる天然記念物のオオサンショウオは、採ってはいけないということは知っていた。しかし田植えの済んだ山田の、一番下の水の下がり口に大きめの竹の籠を置いておくと、サンショウオが獲れる。痔に効くとかで、祖母のために時々持ってきてくれた。このサンショウオはハンザキとは違ってイモリを大きくしたような50センチ近いものである。

庭に藁を結んで積み上げて火をつけ、煙が出なくなったころ放り込むと、一瞬火を蹴散らして暴れ、灰まみれで死んでしまう。その皮を剥くと白い身が現れる。ぶった切りにして味噌で炊いて食べるのだが、鶏のような歯ざわりだった。山椒のにおいがした記憶はない。ただその後図鑑で調べても、こんな大きなサンショウオは載っていない。夜行性なので調査されないままに、絶滅してしまったのだろうか。